



じつきょう

商業教育資料 No. 65 通巻353号

生涯学習社会における学び方 —放送大学「15の活用法」—

文部科学省生涯学習政策局調査企画課長
(前放送大学学園教務部長)

山田 道夫

1. はじめに

21世紀は、「生涯学習の時代」とも言われる。国際化、情報化、技術革新の進展など、世の中の変化のスピードが加速し、また、「人生80年」時代を迎えた今日、20歳前後までの学校教育で一度身につけた知識・技術だけで、職業生活・社会生活を全うすることは困難になっている。こうして、学校教育への依存傾向の強いわが国でも、人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶこと（生涯学習）の重要性が認識されるようになってきた。そして、この生涯学習の中核的機関（シンボル）として放送大学が設置され、多くの国民に利用されている。

本稿では、生涯学習社会における「学び方」のモデルとして、放送大学の活用法について、高等学校との関係を含めて紹介していきたい。

2. 生涯学習と生涯学習社会

「生涯学習」とは、「人々の生涯を通じて、多様な場で展開される多様な学習活動を包括する中心概念」（平成14年度・文部科学白書）とされる。個人に即して言えば、「新しい知識・技術等の習得を

めざして行われる個々の学習（活動）」となる。

生涯学習は、したがって、学校教育や社会教育の中で、意図的・組織的な学習活動として行われるだけでなく、スポーツ・文化活動などの中でも行われ、活動の場も、小・中・高校、大学や公民館、図書館などのほか、家庭やスポーツ・文化施設、カルチャーセンター、企業など、多岐にわたっている。

わが国では、従来、高校・大学等までの「学歴（学校歴）」が過大に評価される「学歴社会」であるとされ、その弊害が指摘されてきた。しかし、科学技術の高度化、国際化、情報化などの下で、人々は絶えず新たな知識・技術等を習得する必要が生じている。また、物質的（経済的）な豊かさだけでなく、心の豊かさ、生きがいを求める人々の学習意欲の高まりが見られる。

このため、「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価されるような社会（生涯学習社会）」「学習歴社会」の構築が求められている。

3. 放送大学と生涯学習

放送大学は、人々の多様な学習意欲の高まりに応え、「生涯学習社会」の実現に向け、広く社会人等

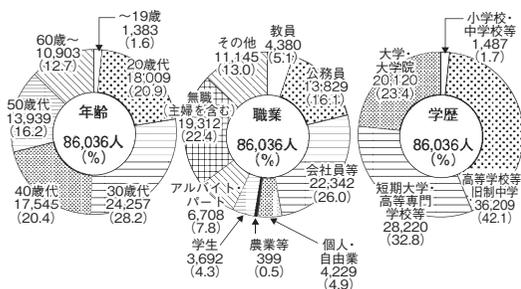
目 次

生涯学習社会における学び方 ……………	1	これからのビジネス教育……………	8
大学通信教育と商業科教育 ……………	4	科目「ビジネス基礎」における 指導と評価について……………	12

に大学教育の機会を提供するため、テレビ・ラジオなどの新しいメディアを効果的に活用した新しいタイプの高等教育機関として、昭和60年に学生受け入れを開始し、放送授業をスタートした。

放送大学には、現在、教養学部と大学院を合わせて、約10万人の学生が学んでおり、これまでに約2万6千人の卒業生を社会に輩出している。また、放送大学の学習者は、累計で78万人余にも上る。

放送大学（教養学部）の学生像を見ると、年齢層は、15歳から90歳代まで幅広く、その中心は20歳代～40歳代、職業では、会社員、公務員等の職業人が多数を占めている。学歴では、大学・大学院卒が約4分の1、短大・高専・専門学校卒が約3分の1で、一度高等教育を終えて就職した後に学び直す人や、学び続ける人が6割近くを占めている。



放送大学の学生の属性(教養学部)：平成15年度第1学期

また、本学卒業生に対するアンケートによれば、入学目的は、

- ① アクセスの容易さ（学費が安い、入学試験がない、通学制大学は困難など）37%
- ② 余暇活動の充実（勉強が好きだからなど）35%
- ③ 職業・学業上の必要（仕事に役立てるため、大学院進学など）27%

であり、卒業後の進路は、職業生活などに変化があった者（全体の24%）のうち、「大学院に進学」22%、「他の大学などに入学」13%、「大卒資格を生かして資格取得」11%、「大卒資格を生かして就職」11%、などとなっている。

このように、放送大学は、わが国の生涯学習の中核的機関、最大の通信制大学として大きな役割を果たしている。

4. 放送大学の特長

放送大学は、以下のようなユニークで弾力的な教育システムにより、「いつでも、どこでも、だれでも学べる」という創設理念を実現している。

- ① 自宅でのテレビ・ラジオ視聴と印刷教材により、マイペースで学べる。

授業番組は、早朝から深夜まで全国放送（CSデジタル無料放送）しており、関東地域では地上放送（UHF, FM）も行っている。また、全都道府県に学習センターがあり、面接授業を受けたり、ビデオテープ・オーディオテープの再視聴ができる。

- ② 入学試験がない。

卒業をめざす全科履修生（4年以上在学。「学士（教養）」の学位が取れる）には、満18歳以上で大学入学資格があれば、だれでも入学できる。

- ③ 1科目からでも学べる。

学びたい科目を学ぶ選科履修生（1年間在学）・科目履修生（6か月間在学）には、満15歳以上であれば、だれでも入学できる。将来、全科履修生に入学した場合、既に修得した単位は、卒業要件の単位として認定される。

- ④ 2学期制であり、入学機会は年2回（4月、10月）ある。

- ⑤ 人文・社会・自然・産業・外国語等の幅広い分野の約300科目を用意している。

5. 放送大学「15の活用法」

放送大学は、社会人・職業人はもとより、高校在学中・卒業後、大学・短大や大学院等に在学中・卒業後、あるいは退職後など、人生の各ステージに応じ、また、2度でも3度でも、学歴取得、資格取得、キャリア・アップ、教養向上など、各人の学ぶ目的にしたがって、自由自在に活用できる（次ページの図参照）。

すなわち、放送大学は、人々や社会に、多様な「学び方」のモデルを示すとともに、学習の「積み重ね」を適切に評価する仕組みを提供している。

6. 高等学校と放送大学

参考までに、高等学校における放送大学の利用法を、以下に掲げる。

- (1) 生徒の単位認定の対象となる学修として—高大連携—

- ① 学校教育法施行規則の改正により、高校生の学校外における一定の学修を校長が卒業単位に認定できるようになった。本学では、平成11年度第2学期から、高校生を選科履修生・科目履修生として受け入れているが、高校生の数は毎年増加し、

現在、全国で174人、累計では968人にも上る。高校在学中に大学の単位が取得できる、「高大連携」の最も進んだ形態となっているが、本学は通信制なので、近隣に適切な大学等の少ない高校や高校生にとっては、特に利用しやすい。

② 本学では、学校単位の集団利用を支援するため、高校との連携協力を行っており（現在、千葉未来高校、東京都立八潮高校、広島県立祇園北高校、福岡県立博多青松高校、鹿児島県立武岡台高校の5校）、高校側には、20人以上の生徒が一括入学する場合の入学料半額割引、ビデオテープ等の無償貸与などのメリットがある。

(2) 生徒の卒業後の進学先として

放送大学に、全科履修生として4年以上在学し、所定の単位数を修得すれば、「学士（教養）」の学位が取れるので、高校生の卒業後の進学先としても考えられる。特に、全科履修生の在学年限は10年間なので、働きながら、自分に合ったペースで学べる。また、短大、専門学校等を卒業した後に、本学の3年次に編入学したり、本学の選科履修生・科目履修生として学び、大学評価・学位授与機構で学位を取得することもできる。

なお、選科履修生・科目履修生として16単位以上を修得し、満18歳以上になれば、本学の全科履

修生に入学できるので、高校中退者、中卒者等の大学進学の方法としても活用できる。

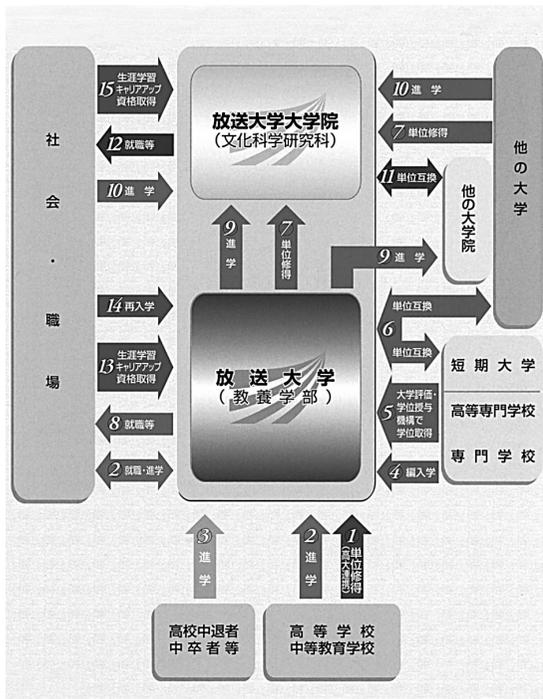
(3) 教職員のキャリア・アップ—放送大学大学院を活用した専修免許状等の取得—

放送大学に、高度専門職業人養成のための大学院（修士課程）が設置され、平成14年度から学生受け入れを開始したが、本学大学院では、1種免許状を有する現職教員が「上進制度」により専修免許状を取得するために必要な科目の一部を開設しているので、在職のまま修士科目生（満18歳以上であれば、だれでも入学できる）として入学し、自宅で専修免許状が取れる。

また、学校図書館法の改正により、平成15年度以降、小・中・高校等（12学級以上）に司書教諭の配置が義務づけられているが、本学（教養学部）では、文部科学省の委嘱を受け、学校図書館司書教諭講習を実施している。放送授業（5科目）は夏期集中型で、試験をレポートで行うため、自宅で資格が取れる。

〈参考〉現職教員の放送大学の利用状況

- （教養学部）
- ・平成15年度 第1学期
4,380人（教養学部学生の5%）
 - ・平成14年度 学校図書館司書教諭講習受講者数
1,545人
- （大学院）
- ・平成15年度 第1学期
7,116人（大学院学生の57%）



放送大学「15の活用法」

7. おわりに

放送大学は、開学以来19年、全国化から5年を経たが、関東以外の地域では、残念ながらまだ十分には知られていない。今後さらに、認知度を向上させるとともに、国民（学生）の多様な学習ニーズに応え、教育内容・方法の一層の改善・充実を図ることにより、「生涯学習社会」の実現に寄与していきたい。

詳しくは、放送大学本部又は各学習センターにお問い合わせいただきたい。

（本部）〒261-8586 千葉市美浜区若葉 2-11

TEL .043-276-5111 (代) <http://www.u-air.ac.jp/hp>